

生きる 支える
心
あわせて

「ドはどいふ」。ピアノの鍵盤を一つずつたたいて探すのは、愛知県大府市の鳥飼美津代さん(66)。六月から、自宅近くのピアノ教室に週一回、通っている。

フランス民謡の「月の光」など、簡単な曲を弾けるようになった。伴奏に合わせて歌を歌うのも好きだ。四年前からアルツハイマー型認知症を患い、直近の記憶はすぐに忘れてしまつたので、やさしい曲でも弾けたり弾けなくなったりする。でも、隣で一緒に鍵盤を探す夫の憲一さん(66)は「忘れるのは仕方ない。遊び感覚で楽しんでくれればいい」。発症前は歌や音楽を好まなかった美津代さん。ピアノを始めたのは、去年購入したキーボードに並々ならぬ興味を示したから。「認知症の人がやることではないかもしれないけど」。憲一さんは迷った

あんずカフェで、スタッフの熊谷貴子さん(右)と談笑する鳥飼美津代さん(左)、夫の憲一さん(手前右から2人目)＝愛知県大府市で



認知症の妻に寄り添う

①

が、思い切って講師の小堂ひとみさん(66)に頼んだ。講師歴四十年の小堂さんでも、認知症の人を一对一で教

えるのは初めて。数年前から学ぶ音楽療法の手法を取り入れ、最初は手遊びをしながら童謡を歌い、音楽に親しんで

夫婦で外出、カフェにも

もらった。「いつ飽きられるかとハラハラしています」と笑いながら、「最近の美津代さんは楽譜を見て弾こうとしているので、進歩しています。音楽の力かな」と目を細める。

美津代さんは発症前、引退込み思案で人付き合いも好まなかったが、今では「外に出たい」「行きたい」と言うことが増えた。美津代さんの気を紛らわせようと、憲一さんは毎日、一緒に近くの公園までウォーキングして、近所の人と一緒にラジオ体操もする。深夜には自宅周辺のドラ

イブも。お供は美空ひばりのCDだ。「歌いながら、どこかへ出かけると安心するみたい」と言う。

この九月から、近くの認知症カフェにも二人で顔を出すようになった。市内で毎月第二日曜日に開かれる「あんずカフェ」。十二月には、スタッフとたこ焼きを焼き、参加者に振る舞った。

最初、認知症カフェにはどんな人が来ていて、何をやるのかも分からず、足を踏み入れる気にはなれなかったという。でも、認知症の人への対応を知っているスタッフがおり、介護者同士で交流できることもあと知った。美津代さんがはしゃぐ様子を横目に、憲一さんはつかの間、コーヒーで一服した。

カフェを主催する一人で看護師の熊谷貴子さん(45)は、カフェの数日後に、憲一さんから届く絵手紙に救われた。「心あつたまる おもてなしありがとうございます」。ちよつと、客足が伸びず悩んだ時期だったから。

憲一さんは「自分も感謝されるとうれしいし、頑張ろうって思える。やっぱり妻でも誰にでも『ありがとう』って、感謝を声に出さないとね」と話す。認知症の人やその家族の支えになるカフェ。ちよつとした心遣いで、支える側になったりする。

十二月のカフェで、二人は二時間ほどくつろいだ。そろそろ帰ろうと腰を上げると、「来年一月もまた来てくださいいね」と、スタッフ全員から明るい声をかけられた。美津代さんが約束するように熊谷さんと固く握手する様子に、憲一さんも顔を緩ませた。

(出口有紀)